

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 4 日現在

機関番号：32686

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2011～2013

課題番号：23652009

研究課題名(和文) 欧米における禅の変容の研究

研究課題名(英文) Research on the Transformation of Zen in the West

研究代表者

佐藤 研 (SATO, Migaku)

立教大学・文学部・教授

研究者番号：00187238

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円、(間接経費) 750,000円

研究成果の概要(和文)：禅が欧米でどのように変貌して行ったかは一枚岩ではなく、宗派ごとに異なる。曹洞宗は(日本でもそうであるように)「坐」にのみ集中し、僧籍の者を一定数欧米に措定することで日本の曹洞宗の宗教文化的「出島」を創出している。他方臨済宗は、特に欧州では十全な公案禅の(翻訳による)展開が困難なために、いわば「半伝播」の次元に抑えて展開している。公案体系を翻訳で常備し、自己の本質の悟りを正面から課題とすることでキリスト教徒も含めて一種の普遍禅の実験を開始したのは、在家禅の三宝教団系である。「禅」が西洋でどのように大胆に変貌して行くかは、爾後の三宝教団系の活動に注目することで一指標が明らかになる。

研究成果の概要(英文)：How Zen has changed in the West is not monolithic, but different from Zen school to Zen school. The Soto School, as it is in Japan, concentrates itself upon "just sitting," while installing a certain number of priests in the West. It can be described as creating a secondary stream after the main stream in Japan. Also, the Rinzai School has not fully developed its independent activities in the West, mainly because of the difficulties to translate its koan education system in Western languages. In this context, the Sanbo-Kyodan Line, a lay organization, is unique in its experiment of creating a universal Zen, including Christian practitioners, through full translation of its koan system as well as through focusing on the discovery of one's "true self" in Zen practice. How dramatically Zen could be transformed in the future in the West could be best observed, as it seems, when one closely follows the development of the Sanbo-Kyodan Line from now on.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・宗教学

キーワード：坐禅 公案 在家 臨済宗 曹洞宗 修行 禅キリスト教 禅

1. 研究開始当初の背景

私は 2005-06 年の科研費において、「行」としての坐禅が 1960 年代終り頃から欧州に渡ることにより、キリスト教がどれほど変貌するか、その可能性を探った。その成果は、佐藤研¹『禅キリスト教の誕生』岩波書店、2007 年の、とりわけ 139 - 153 頁、および私のホームページに公表してある

(<http://www2.rikkyo.ac.jp/web/msato/Fragbogen-Einl.htm>)。それによれば、西洋のキリスト教は、坐禅運動から本質に関わる大きな挑戦を受け、これまでのキリスト教のとりわけ神学的(神観・キリスト論)分野において大きな変貌を余儀なくされる、と結論づけた。しかしその研究調査の過程で、西洋に渡った坐禅運動が、これまでの日本における坐禅とどこか異なった展開を示し始めてはいないか、気になり始めた。また、これから西洋における坐禅運動がどのような軌跡を描いていくのかも関心の対象となった。これが今回の研究の背景である。

2. 研究の目的

20 世紀後半において日本から西洋に渡り、現在その地で熱心に実践されている禅理論的な禅哲学ではなく、実地の坐禅修行

が、これまで日本においてなされていた禅の実践及びその理解に較べ、何らかの重要な内容的変容を遂げているか否かを査定し、それによって、禅が西洋に渡った事実の現時点での総括を試みることを目的とする。なお、調査考察の地理的範囲としては、時間その他の制約から、主として西欧、従として北アメリカ大陸を対象とする。

3. 研究の方法

(1) 西洋における坐禅運動に関する諸著作、およびその担い手たちの諸著作の検討。これはインターネットのホームページを含む。

(2) 西洋にて禅を教授している日本人師家・禅教師へのインタビュー。およびその禅道場の見学調査。

(3) 西洋にて禅を行じている人々、とりわけ禅の指導にたずさわっている人たちへのアンケート調査。

これら三者の観察の総合によって考察する。

4. 研究成果

(1) まず確認しておくべきは、第二次世界大戦後の復興期以降、西洋において、坐禅のみならず、広く Meditation と呼べる瞑想活動を受容ないしそれを要求する素地が発生した事実がある。それを促したのは、一つには伝統的キリスト教体制への絶望である。教会は政治世界および精神世界における権力体制と化し、その神学は教義的固定化と前時代的神話性の故に人々の内面には届かなくなってしまった。つまり、どのようにしたら元来の命の深みに達しうるのか、西洋世界の一般的住民たちはそれを渴望する中で、神学

や教会とは一線を画した冥想的行為の中にこれまでにない未知の精神的可能性を予感するに至ったと言える。これと並んで、西洋文明総体の「主知主義」への懐疑・絶望がある。人々は、何かを対象的に「理解」するのではなく、自ら体験的全体的に把握せずには真のものが得られないと感ずるに至ったといえる。どちらも、西洋文化の不可避的な相対化プロセスの中での深刻な現象であると言えよう。

(2) 西洋における禅の伝播を考えれば、曹洞宗、臨済宗、そして三宝教団系の三者が伝道を試みてきたと言える。

曹洞宗は、弟子丸泰仙(1914-1982)が 1967 年にフランスに単身で渡って以来、その弟子筋がフランスを中心にヨーロッパ全体に今なお根強い浸透度を示している。米国に曹洞禅を伝えた最初のパイオニアは、1959 年にカリフォルニアに渡った鈴木俊隆

(1904-1971 年)であるが、彼が 1961 年に開いた「サンフランシスコ禅センター」は、その後のアメリカの(曹洞)禅に強い影響を与えた。そしてさらには、それ以外の曹洞禅僧侶が西洋に渡ったケース、あるいは現地で西洋人が僧籍に入ってその運動を担っているケースが多数存在している。

現今の曹洞宗は、いわゆる悟りの体験を目さないために、いわゆる只管打坐と、その担い手たちの生き方が中心となる。その単純さがかえって伝播にはプラスに働いた面があるろう。もっとも、それでも偶発的に禅体験を得た者たちや、一層の内的深まりを求める者たちに対しては、独参による個人指導がないために、指導の限界が発生してしまうというマイナスを具有している。

臨済宗は、北アメリカに関しては、三島・龍沢寺管長の中川宋淵(1907-84)の弟子で 1964 年に単身ニューヨークに渡った嶋野榮道(1932-)の活動が特記される。最近では、妙心寺派・岡山曹源寺の住職・原田正道の広めた「一滴」禅が北米とヨーロッパの双方に拠点を広めている。また、方廣寺派の大井際断(1915-)も 1970-80 年代にしばしばドイツ各地で禅の指導を行い、その弟子の活動もあって、現在ドイツで幾つかの支点を有している。それ以外も、現在では、西洋に場を持つ多くの臨済僧侶の活動が確認できる。

ただし、以上の曹洞宗・臨済宗のどちらの場合も、基本においては得度した僧侶籍の者たちを主体とした寺院体制を前提にしている。それは、日本から渡った僧侶の場合もあれば、現地人が(日本で修行したか現地で修行したかは問わない)僧籍に入って体制を維持している場合もある。しかしこれは、文化的に見れば、日本の「禅文化の輸出」という

形態を採っており、敢えて言えば、日本禅の支流に留まっている。

西洋で一番浸透しているのは、三宝教団系の禅であろう。北米では、この線は1959年にハワイにダイヤモンド・サンガを開いたR・エイトケン(1917-2010)が、三宝教団の山田耕雲(1907-1989)から1985年に嗣法し、広く展開した。ヨーロッパで特筆すべきは、同じく山田耕雲の弟子であったH・ラサール神父(日本名・愛宮真備、1898-1990)が1968年頃から行った坐禅活動である。この三宝教団は、キリスト教者も坐禅を実践し、かつ証悟体験を得ることが出来ることを公言したが、ラサールは毎年数多くの撮心をドイツ中心に展開することによって、それを実際に証していった。この彼のつてを頼って、多くの神父や修道女、そしてキリスト教関係者たちが日本の三宝教団道場に至り、そこで修行して教師資格を得て西洋に戻った。この事実が、今なおキリスト教的精神が根底で生きているドイツなどを中心に、ヨーロッパで三宝教団系(三宝教団から2009年に別れたW.イエーガー神父の流れも含む)の参禅者が増えていった根底をなしている。また、その流れは、先のダイヤモンド・サンガとは別の経路を経て、現在北アメリカに新たに達し、活発な展開を見せている。

しかしながら、特徴的なことは、三宝教団系の禅の指導者にはいわゆる僧侶がいないこと、これが基本的に在家の禅運動であることである。くわえて、中にキリスト教者を多く抱えることからわかるように、仏教の枠をも飛び越えた「宗教フリー」の立場を鮮明に打ち出している。その際強調されるのは、坐ることと公案参究で自己の「本性」を悟ることである。これは曹洞宗ではもはや語らず、また臨済宗でも現在はここまで明瞭に前面には出さなくなった点である。つまり、三宝教団は、原理的に禅が日本の地を離れる事態を想定し、にもかかわらず人間学的に普遍的根源的な自己究明のプログラムを前面に掲げているということである。そうであれば、西洋において「禅」がどのように独自の変貌と発展を見せるか、その最も代表的なテスト・ケースはこれからの三宝教団系の展開に見られると言っても過言ではないであろう。

(3) これらの坐禅の伝播 北米でもヨーロッパでも を横断的に観察して分かることの一つは、坐禅がその裾野を拡大し、心理精神疾患を癒すための手段としても積極的に援用され始まっていることである。これはこれまでの日本の禅界および医療界にはほとんど存在しなかった事態である。この新しい展開は、禅の関係者が、精神医療の専門家と密接な連携を保ちつつ協働していくこ

との必要性を示唆しているであろう。

(4) 言語面で言えば、西洋に日本語の禅文化をそのまま持ち込もうとする動きには当然限界があり、やがては翻訳というチャンネルを通らざるを得ない。しかしながら、翻訳とは、原テキストに対して常にそれを「裏切る」関係にあり(Traduttore, traditore) 方法論的な困難がつきまとう。

しかし言語面の最大の問題は、儀式の次第や経本テキストのそれではない。臨済宗と三宝教団系が使用している公案体系のもつ問題性である。元来古代中国の漢文を素地とする公案体系をどのように翻訳でこなすか。特に、臨済系の僧堂では、個々の公案に著語を添える(伝統的な詩句をコメントとして付加する)という課題を課するのが一般的であるため、それらを全て翻訳でこなすことはほぼ不可能である。つまり、臨済宗の公案禅は西洋には十全には伝わりきらないであろう(この点で、公案を使わず、ただ坐ることと仏事に一切を見出す曹洞宗は荷が軽いと思われる)。三宝教団系では、著語は用いていないため、翻訳は公案集のみに限定されている。そのために、西洋の三宝教団系では公案課程が日本の道場と同じように重要視され、修行の根幹をなしている。そうであればあるだけ、公案翻訳の改訂作業に常に努めねばならず、独自の困難性の前に立っているとと言える。また、そうした公案を、翻訳テキストを通して、深く内容的に把握するのはそもそも容易なことではない。つまり、三宝教団系には、独自の展開をする素地が整っていると同時に、内容的な困難さも控えていると言える。

(5) 儀式の面で言えば、西洋の曹洞宗と臨済宗も、基本的には日本の寺院の儀式を踏襲している。そこでは、著しい逸脱やさらなる展開は見られないと言って良い。異なるのは三宝教団系のみである。後者の運動では、その日本の道場では儀式も正式に行われているものの、儀式の自己目的的な重要視はなされない。したがって、西洋の三宝教団系の道場では、儀式の有無の程度やその遂行の仕方は、その道場の禅教師の判断に任されている。そのため、キリスト教の典礼を禅の枠組みの中に入れた運動形態も一部では存在し、独自の展開を示していると言える。こうした「禅キリスト教」的展開も、禅の正統な可能性であることが新たに認識されねばならない。ここには極めて斬新な発展形態が示唆されている(もっともその際、その「キリスト教」も、己の自己理解を根源的に つまり禅的に 把握し直すことになる。禅体験は、キリスト教の諸概念をひとまず解体させ、やがてそれらを換骨奪胎せずにはいないからである)。

(6) 社会学的に特徴的なことは、西洋に渡った禅は、ほぼすべからく「在家」中心の禅

運動になっている。このことは、とりわけ(そもそも在家禅の集団である)三宝教団系の運動では歴然としている。禅は、三宝教団によって西洋(とりわけヨーロッパ)に渡ることにより、その「禅寺」的な支配から己を解放したと言える。もっとも、三宝教団に限らず、欧米では坐禅を行う一般大衆の大部分が「在家」である。寺の住職となるという職業準備のため坐る、という発想が皆無であるため、坐禅をする動機が逆に個人的に純粹になり、それだけ徹底的に実存的になるとすら言える。

(7)なお、修行の形態について一言すれば、日本の禅道場にあるような、暴力的「厳しさ」は、西洋の禅道場には存在しない。警策による過度の殴打に身を挺することをもって厳しき修行とする如き風潮は、これまで受容されていないし、これからも受容されることはあり得ないであろう。また攝心の形態も、個人のプライバシーをことごとく放棄するような運営にはなっていない。

(8)以上、まとめれば次の様に言えよう。坐禅は、過去 50 年間、文化史的終末状況にある欧米において、砂地に水が沁み込むように受容されたのであるが、どのように変貌して行ったかは一枚岩的ではなく、宗派ごとに異なる観察が必要である。今のところ、曹洞宗は(日本でもそうであるように)「坐」にのみ集中し、僧籍の者を一定数欧米に指定することで日本の曹洞宗の宗教文化的「出島」を創出している感がある。しかし「坐」の人間の普遍性と、「坐」に賭けた担い手たちの生き方の模範力からして、その運動はこれからもそれなりに伝播して行くであろう。ただ、どれだけ大胆に西洋精神の中に革命的に入っていくかどうかは、さらに観察しなければならない。他方臨済宗は、特に欧州では十全な公案禅の(翻訳による)展開を差し控えざるを得ないために、いわば「半伝播」の次元に抑えて展開している。これもいわば「出島」形態の伝播と言えるかも知れない。公案体系を翻訳で常備し、自己の本質の悟りを正面から課題とすることで、普遍禅の実験を開始したのは、在家禅の三宝教団系である。「禅」が欧州及び北米でどのように生きて伝わり、どのように変貌して行くかは、これからの三宝教団系の活動に注目することで一つの指標が明らかになると思われる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 件)

〔学会発表〕(計 件)

〔図書〕(計 2 件)

1. 佐藤研、ぷねうま舎、『禅キリスト教の展開』2015年、約280頁。

2. 佐藤研、久保田浩(編著) 他、リトン社、『文化接触の創造力』2013年、79-102頁(「禅はヨーロッパでどう変わったか」)

〔産業財産権〕
出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

佐藤 研 (SATO, Migaku)
立教大学文学部・キリスト教学研究科・教授

研究者番号：
00187238

(2)研究分担者

なし ()

研究者番号：

(3)連携研究者

なし ()

研究者番号：